

[創作音楽劇]

Antonio ～ヴィヴァルディの生涯～

Theatrical Script of ANTONIO -the Life and death of Antonio Vivaldi-

狩 谷 新

Kariya Shin

プロローグ 1741年8月某日 ザクセン公国

ヨハン・セバスチャン・バッハの自宅

新聞を持ったバッハ（56）と妻のアンナ（40）登場

アンナ「どうなさったの？あなた？」

バッハ「アントニオが…」

アンナ「アントニオ？」

バッハ「アントニオ・ヴィヴァルディ」

アンナ「ヨハン、あなたが楽譜を集めていらした方？」

バッハ「そうだ。会ったことはないが、稀代のヴァイオリニストで、作曲家として音楽を
更なる高みに押し上げた男だ」

アンナ「あなたと同じね」

バッハ「わしなど足元にも及ばん。ヴェネチアで、いつでも自由に演奏させることのできる
独自の楽団を持っていて、合奏協奏曲、コンチェルト・グロッツを完成させたんだ」

アンナ「そのアントニオが、どうかしたの？」

バッハ「死んだんだ」

アンナ「亡くなった？」

バッハ「ウイーンでオペラの準備をしていたらしい」

アンナ「こんな時期にオペラを？」

バッハ「一番の理解者だった国王が亡くなったからな」

アンナ「カール六世の後をマリア・テレジア様がおつぎになって」

バッハ「継承戦争だ。オペラどころの騒ぎじゃなかった」

アンナ「苦勞なされたのね」

バッハ「もともとと丈夫な方じゃなかった。オペラの準備で借金も嵩んでたんだらう。ケル
ン・トナートーア劇場の宿舎で、一人静かに息を引き取ったらしい」

アンナ「いつ？」

バッハ「7月28日…」

アンナ「ご家族は？」

バッハ「独身だった。遺体は、病院の付属墓地に葬られたそうだ」

アンナ「…寂しいわね」

バッハ「死を迎える時、人は誰でも一人だ」

アンナ「そうかもしれないけど。看取ってくださる方が一人もいないのは…」

バッハ「わしには耐えられないだろうな」

アンナ「あなたには私も子供たちもいるわ」

バッハ「確かにわしは幸せものだ。しかし、アントニオもずっと一人だったわけじゃない」

アンナ「お父様もヴァイオリニストだったのよね」

バッハ「サンマルコ大聖堂のオーケストラの一員だった。1678年3月4日、アントニオは、二年前に結婚したジョバンニとカミラ・ヴィヴァルディの長男として生まれた」

アンナ「早熟の天才だったのよね」

バッハ「父親の教育を受け、幼いころから礼拝堂楽団と接していたアントニオは、10歳で教会付属の学校に入った」

ヴァイオリン独奏

10代のアントニオの演奏を背景にメインタイトル

「ANTONIO ～ヴィヴァルディの生涯～」

第一幕 サンマルコ大聖堂 1689年 アントニオ11歳

ヴァイオリンの調整をしているアントニオのところにジョヴァンニ・レグレンツィ(63)がやってくる。

レグレンツィ「熱心だな、アントニオ」

アントニオ「レグレンツィ先生！すみません。すぐに終わりますから」

レグレンツィ「謝ることはない。演奏家が楽器を労わるのは大切なことだ。音楽は楽しいか？」

アントニオ「大好きです。ヴァイオリン1台だけでも十分美しいのに、ここにはそれが8台、ヴィオレッタが11、ヴィオラが2、コントラバスが3、テオルバが4、コルネットが2つに、ファゴット、3台のトロンボーンまである。34人が同時に出す音は、最高です」

レグレンツィ「司祭になる勉強はどうなんだ？」

アントニオ「頑張ってます。でも…」

レグレンツィ「でも？」

アントニオ「床屋の息子が出世するには、司祭になるのが一番だって、父さんが…」

レグレンツィ「それが不満か？」

アントニオ「学校に通って、勉強すれば、司祭には誰でもなれるでしょ？」

レグレンツィ「誰でもってわけではないが…」

アントニオ「でも勉強しただけじゃ、レグレンツィ先生にはなれない」

レグレンツィ「わしのようにになりたいのか？」

アントニオ「はい。先生のような音楽家になりたいんです」

レグレンツィ「わしが、ベルガモのサンタ・マリア・マッジョーレ教会のオルガニストになったのは、19の時だ」

アントニオ「僕もオルガンを 習えば…」

レグレンツィ「お前なら18でなれるかもしれん」

アントニオ「頑張ります！」

レグレンツィ「そうあせるな。わしはそれから、11年オルガンを弾き続け、その後、ここヴァネツィアの救貧院で教師になったが、そこで16年、ようやく望んでいたこの大寺院の副学長になった時には、55だった」

アントニオ「すごいじゃないですか」

レグレンツィ「長すぎる。お前はわしのように時間を無駄にすべきではない」

アントニオ「司祭になるのは回り道じゃないってことですか？」

レグレンツィ「むしろ近道だ。このまま学んでいれば、15で剃髪、22で助祭、25で司祭になる。わしがまだ5年もオルガン弾きを続けなけりゃならんかった歳で、立派に教師として職に就けるわけじゃ」

アントニオ「でも僕には持病が…」

レグレンツィ「喘息のことか？」

アントニオ「一度咳が出始めると…」

レグレンツィ「咳が出るのは、どんな時じゃ」

アントニオ「？」

レグレンツィ「演奏中は大丈夫じゃろ」

アントニオ「ええ、声を出さなければ…」

レグレンツィ「つまり、音楽と向き合ってる時は大丈夫ってことじゃ」

アントニオ「でもミサでお話するときには…」

レグレンツィ「いつもなのか？」

アントニオ「そういうわけじゃありませんが」

レグレンツィ「司祭という資格が大切なんじゃ。実際にミサをするかどうかは、別の話」

アントニオ「そんなことが、許されるんでしょうか？」

レグレンツィ「いいか、アントニオ。もし、お前以外の誰かが、同じ夢を目指そうとすれば、そいつは、司祭を目指す勉強に加えて、ヴァイオリンの腕も一から磨かねばならん。お前なら片方だけで済むんだ」

アントニオ「でも音楽の勉強も…」

レグレンツィ「楽しんでできることに苦労はない。ほんの少し頑張っ、て、司祭になるん
じゃ」

アントニオ「…」

暗転。

幕間①

バッハとアンナ登場。

アンナ「彼はレグレンツィの教えを守ったのね」

バッハ「その通りだ。1703年3月25日、25歳で司祭になった。しかも、その後、喘息で、何回かミサを続けることができなくなって、9月には、ミサを免除され、平服の在俗司祭になった」

アンナ「そして、このピエタ慈善院付属音楽院でヴァイオリンを教えることになったのね」

バッハ「18世紀のヴェネチアは、1年の大半がお祭り騒ぎで明け暮れていた」

アンナ「年末の謝肉祭、2月から7月30日まではキリスト昇天祭、そして10月の最初の月曜から、12月15日までは秋のカーニバルシーズン」

バッハ「貴族が商人として築き上げた富を使い果たそうとしていたようだった」

第二幕 ヴェネチアの狂騒 サンマルコ広場

ドレスと派手なタキシードに身を包んだ男女が仮面をつけて踊る

幕間②

バッハとアンナ。

バッハ「貴族は自由を享受し、民衆は幸福になる権利を持っていた。貴族はともかく民衆は、決して生活が豊かだったわけじゃない。刹那的な快樂に浸っていただけだ」

アンナ「そんな中でも、捨て子の養育を目的に建てられたこの音楽院は、機能してたでしょ」

バッハ「設立は1346年だ。ピエタの他にも、インクラービリ、メンディカンディ、オスペダレットと全部で4つもあって、才能のある女子には音楽教育も盛んだった」

アンナ「教えていたのはヴァイオリンだけ？」

バッハ「最初はそうだったらしいが、すぐに合奏の指導も任された」

アンナ「それで、作曲も始めたのね」

バッハ「そうだ。慈善院は定期的に演奏会を開いていて、そこで演奏する曲を作って提供していたんだ」

第三幕 ピエタ慈善院付属音楽院 1705年 アントニオ27歳

机に向かって一心にペンを走らせているアントニオ。

そこへやってくる慈善院の女子3名。

女子1「イル・プレーテ・ロッソ！」

女子2「赤毛司祭様！」

女子三人「司祭様！」

アントニオ「(ようやく気付いて) どうしたんだ？三人揃って」

女子3「ずっとお呼びしていたんですよ」

女子1「聞こえませんでした？」

アントニオ「集中していたんでね」

女子2「赤毛司祭様は、楽譜を写すよりも早く作曲なさるんですよね」

アントニオ「そこまで早くはないと思うけど…」

女子1「この間出版されたトリオソナタ集はどのくらいで書き上げられたんですか？」

アントニオ「あれは書き溜めたのをまとめただけだから」

女子2「赤毛司祭の代表作なんでしょ？」

アントニオ「あの12曲は、アルカンジェロ・コレッリ先生の教えをなぞった、いわば習作だよ」

女子3「習作？」

アントニオ「研究論文みたいなものだ。優れた先達の業績を分析して、発展形を示したっていうところかな？」

女子1「難しいことはわからないけど、いつもの練習曲とは少し違ってたわよね」

アントニオ「いつもは実験的だったからね」

女子2「私たちはモルモットってこと？」

アントニオ「とても魅力的なモルモットだ」

女子3「どう魅力的なのかしら？」

女子1「少なくとも女性としての魅力じゃないはずよ」

アントニオ「どうしてかな？」

女子1「だって赤毛の司祭様は一度も、私たちの誰一人も、誘惑なさないもの！」

アントニオ「おいおい、これでも神に使える身なんだぞ」

女子2「それほど直接的じゃなくても、好意を寄せられれば、わかるものですわ」

女子3「優しい目線とか」

女子1「さりげない微笑み」

女子2「自然なボディタッチ！」

アントニオ「僕が君たちを嫌ってるとでも言うのかい？」

女子1「女性として見てらっしゃらないって申し上げますの」

女子2「赤毛の司祭様は、私たちをペットのように可愛がる」

女子3「でもそれは決して、男性が女性に抱く熱い思いには至らない」

アントニオ「君たちは、輝く若さを振りまく最高の演奏者だ。愛さずにはいられない」

女子1「それは、楽器への愛！もし、弦が切れて、音が出なくなったら、さっさとお払い箱！」

女子2「声をなくしたカナリアは捨てられてしまう」

アントニオ「そんなことは…」

女子3「それじゃあ、誰か一人でもお気に入りはいらっしゃる？」

アントニオ「僕は君たちみんなを愛してるんだ」

女子1「それを物足りない！って、感じる乙女もいるんですのよ！」

アントニオ「人を愛するのは素晴らしいことだ。もし、特定の誰かに恋心を抱いて、その相手も自分を愛してくれている！と知ることができれば？」

女子1「最高だわ！」

女子2「天にも昇る気持ち」

女子3「幸せの絶頂！」

アントニオ「そうだろう。そして、その幸せがずっと続くことを願う」

女子1「病める時も」

女子2「健やかなる時も」

女子3「死が二人を分かťまで」

アントニオ「ほら、そこが問題なんだ」

女子1「どこが？二人の愛は永遠に続くんでしょ？」

アントニオ「永遠じゃない。誰にでもいづれ訪れる「死」がやってくるまでだ」

女子2「死が二人を分かťまで…」

アントニオ「人が愛することができるのは、人だけじゃない」

女子3「神への愛？」

アントニオ「司祭としてはイエスと答えるべきだろうな」

女子1「違うっておっしゃるんですか？」

アントニオ「神を愛してないわけじゃない。でも僕にはもっと愛するものがあるんだ」

女子2「その愛は永遠に続くんですの？」

アントニオ「そこまではわからない。でも僕が死んでも愛した結果は残ると思う」

女子3「その相手は、その愛に答えてくださるの？」

アントニオ「なかなか難しい。いくら愛を降り注いでも、ちつとも振り返ってくれないことばかりだ」

女子1「それでも愛してらっしゃる」

女子2「ってことは、よほど魅力的な方なのね」

アントニオ「そうだね。しかも思いを寄せているのは僕だけじゃない」

女子3「ライバルも多い…」

アントニオ「でも、ひとたび受け入れられれば、その見返りは何物にも代えがたい」

女子1「そんなに素晴らしいものなの？」

アントニオ「しかも、その恩恵に預かれるのは僕だけじゃない」

女子2「独り占めにしないでいいの？」

アントニオ「あの幸福感を独り占めにすることこそ罪だ。君たちもその恩恵を受けたことがある」

女子3「私たちも！？」

アントニオ「作曲した僕も、演奏する君たちも、それを聞くすべての観客も、全員が注いだ愛の恩恵を受けるんだ！」

女子1「赤毛の司祭様が、愛してやまないものって…」

女子2「今も向き合っていた…」

女子3「…音楽」

管弦演奏 可能ならトリオソナタ集から一曲
暗転。

幕間③

バッハとアンナ。

アンナ「確かに女性には興味がなかったみたいね」

バッハ「アントニオにとって、音楽ほど自由になるものはなかった」

アンナ「音楽のルールを作り上げたあなただからわかるってこと？」

バッハ「それは言えるかもしれん。人はどんなものにも普遍性を求める」

アンナ「定番とか、法則をみつけたがるってことね」

バッハ「そうだ。わたしはそれを過去の作品から読み取ろうとしたが、アントニオには、ピエタがあった」

アンナ「実験できたわけね」

バッハ「そうだ。18世紀の初頭には、のちにバロックと呼ばれる形式が完成されつつあった。教会系の楽曲にはすでにルールがあったってことだ。オペラも形を整えつつあった」

アンナ「アントニオはそのどちらも作っていたわよね」

バッハ「ルールを守りながら新しい風を吹き込むためには、何でも自由に試すことができたピエタは最高のツールだったんだ」

アンナ「でもその頃の曲はほとんど残ってないんでしょ」

バッハ「わたらのような人間には残念としか言いようがないが、アントニオにとってはどうでもいいことかもしれない」

アンナ「どうして、せっかくの業績じゃない」

バッハ「画家にとってのスケッチやデッサンのようなものさ。試してみて、使えそうなら、本来の作品に活かしていく」

アンナ「ハハハッ！」

バッハ「何がおかしい？」

アンナ「気づいてないのね」

バッハ「何がだ？」

アンナ「アントニオは、実験せざるを得なかったのよ」

バッハ「だから、実験を積み重ねて、音楽の可能性を押し広げた」

アンナ「確かにそうね。でも、彼がそうしなければならなかったのは、あなたがいなかったからでしょ？」

バッハ「アントニオは十近くも年上だ」

アンナ「そういう意味じゃないの。二人は結局同じことをしてたってことよ。アントニオにとって残念だったことは、あなたが先に生まれていなかったこと」

バッハ「！」

アンナ「もしあなたの研究成果が先にあれば、アントニオはもっと楽に作品を完成させてたはずだわ」

バッハ「そうかもしれん。だが逆は、成り立たんな」

アンナ「どうして？」

バッハ「彼の生み出した作品がなければ、わたしが音楽を体系化することはできなかった」

アンナ「教会で伝統音楽に親しみ、ピエタでの実験を生かして、コンチェルトを発展させた」

バッハ「1709年にヴァイオリンソナタ集を作品2として出版し、同じ年に、ヴェネチアを訪れたデンマーク王に捧げたソナタ12曲を『ヴァイオリンとハープシコード用の低音のためのソナタ集』として出し、11年には、作品3として、『調和の靈感』も出した」

アンナ「あなたが、その中の特に美しい6曲を他の楽器用に書き直した作品ね」

バッハ「そうだ。アントニオはコンチェルトを変革した！彼こそが先駆者なんだ。彼は、この作品集から、出版を当時、最高峰といわれたアムステルダムのエティエンヌ・ロジェにまかせるようになった」

アンナ「そして、その名前はヨーロッパを席捲した」

バッハ「デンマーク王フリードリヒ4世は、身分を偽ってまで享楽のヴェネチアを堪能し、中でもアントニオのコンチェルトを慈善院の乙女たちの演奏で何度も楽しみ、ロザルバ・カルリエーラに描かせた愛らしい12人の女性の肖像画とともに去ったほどだ」

アンナ「そのすべての作品を完成させるために、ピエタで多くの実験がなされたってことなのね」

バッハ「そうだ。そして、12曲のコンチェルトが作品4として発表されたすぐ後に、彼は劇場デビューした」

第四幕 サン・タンジェロ劇場 1714年 アントニオ36歳

オペラ「狂気を装ったオルランド」からアリア独唱

タイトル「アントニオは、劇場の単なるお抱え作曲家ではなく、運営者、芸術監督として、予算を決め、収支を監視し、女性歌手の訓練をし、後援者に取り入って、数々の成功を収めていった」

拍手に送られ、上手からアントニオ、下手からサントゥリーニ登場。

サントゥリーニ「マエストロ、私の目が正しかったことを証明してくれたようですね」

アントニオ「感謝するのは私の方です。ピエタの演奏家たちの優れた才能を生かす新たな場所を提供していただいた」

サントゥリーニ「確かにそれはマエストロにこの仕事ををお願いする時の条件でしたが、劇場にとっても歓迎すべきものでした。彼女たちを目当てに足を運ぶ客がほとんどです」

アントニオ「オーナーの一人はお気に召さないようですけど？」

サントゥリーニ「ベネディット・マルチェロ…」

アントニオ「彼のように、日々の生活に何の心配もない貴族たちは二つに分かれます」

サントゥリーニ「全員が刹那的な享楽に浸っているわけではないってことですか？」

アントニオ「そういう輩が大半であることは確かです。でもごく稀に、ベネディット・マルチェロのように、どんなに貧しく、明日をも知れぬ身であっても、すべての人間が高潔であることを望む貴族もいるのです」

サントゥリーニ「なるほど。でもその中には、あなたのファンも多いのでは？」

アントニオ「確かにそうです。だから、私は劇場での仕事をある程度、隠さなければならぬ」

サントゥリーニ「何故です？こちらでも大変な業績を残しておられるじゃありませんか？」

アントニオ「劇場で熱狂している観客からいただけるのはお金です。勿論とても大切なものでしょう。それこそ日々の生活に欠かせないものだ。少しでも多く手元に残すためには、多少とも駆け引きが必要です」

サントゥリーニ「当然でしょう。興行というのはそういうものです」

アントニオ「一方で、高潔な皆さんが訪れるピエタでの演奏会は料金を取りません」

サントゥリーニ「確かに直接お金を取るわけではありませんが…」

アントニオ「もちろん、寄付や浄財という形で運営されているのは事実です。サントゥリーニさん、興業の世界で活躍なさっているあなたに、私がヴァイオリンの指導をして、いただけた報酬がいかほどだったか、想像できますか？」

サントゥリーニ「十分だったとは思いませんか…」

アントニオ「一年に150ドゥカート」

サントゥリーニ「21世紀の日本円に換算すると、どんなに多くても25万、月に2万円ちょっとですか！」

アントニオ「マルチェロのような人間はあずかり知らない金額です。彼らは、立って生きている人間はすべて、十分な報酬を得ている、と考えているわけです」

サントゥリーニ「片方は金糸銀糸の豪華な衣装で、もう一方は、継ぎだらけのボロを着ていてもですか？」

アントニオ「もちろん差があるのはご存知でしょう。でも、生きていくために彼らが何をしなければならぬか？とは考えないのです」

サントゥリーニ「生きているのだから、高潔であれってことですか？」

アントニオ「そうです。残念なことに彼らは、その高潔さで作品を評価する目を養っています。これは享乐的な貴族も例外ではありません。しかもそれは、かなり確かなものです」

サントゥリーニ「彼らが認めるものだけが音楽だとおっしゃるのですか？」

アントニオ「必ずしもそうだとは思いません。貴族に二種類あるように優れた音楽も決して一種類ではないでしょう」

サントゥリーニ「劇場の音楽は、ピエタのものとは違う…」

アントニオ「劇場の観客は、日ごろの生活の苦しさを忘れさせてくれる享楽を音楽に求め、ピエタの貴族は、自分たちが忘れていた高潔さを求めている。その象徴が壮麗な教会音楽です」

サントゥリーニ「マエストロはその両方を作られている…」

アントニオ「そのためには、声の大きい貴族のご機嫌とりが必要なんです」

第五幕 ピエタ音楽院 1716年アントニオ37歳

オラトリオ「勝利のユディタ」より、演奏。

拍手とともに下手からピゼンデル（29）それに応えるように上手からアントニオ。
ピゼンデル「マエストロ、この演奏を聴くだけでも、ドレスデンからやってきたかいがありました」

アントニオ「ヨハン・ピゼンデル！ヨーロッパといわれるヴァイオリンの名手からの賛辞はありがたく頂戴しましょう」

ピゼンデル「何をおっしゃいます。私はあなたにヴァイオリンを習うためにやってきたんですよ」

アントニオ「ヨーロッパ随一といわれるザクセン宮廷楽団のソリストに私ごときが教えることなどない、と思いますが」

ピゼンデル「あなたの教えを受けることを条件に楽団は今回の旅行を許してくれたんですよ」

アントニオ「そこまでおだてていくと、これ以上ご辞退するのは失礼のようですね」

ピゼンデル「もちろんです。そのために、ストラディヴァリやバルトロメオの楽器を手に入れてきたんですから」

アントニオ「なるほど。ヨハン、君は何故数ある楽器の中からヴァイオリンを選んだんです？」

ピゼンデル「僕は、9歳から聖歌隊にいたんです。声変わりで、歌えなくなっても音楽を続けたいと思った時、響いたのがヴァイオリンの音色でした」

アントニオ「当時の楽長は、ジュゼッペ・トレッリだったね」

ピゼンデル「そうです。トレッリ先生に手ほどきを受けました」

アントニオ「驚嘆すべき幸運に恵まれていたってことだな」

ピゼンデル「？」

アントニオ「二百年前、ヴァイオリンのすばらしさに気づいたのは、その音色に合わせて踊る普通の人々だった」

ピゼンデル「芸術家には華やかさが嫌われたんでしょうか？」

アントニオ「そうだろうな。でもすぐにその鼻につく派手さは制御されて、作曲家も声に似た音色を重宝するようになって、ソナタに活かされるになり、次第に重要な地位を占め始める」

ピゼンデル「僕はきっと声に似た音色に魅かれたんですね」

アントニオ「それはトレッリが演奏していたからだ。アルカンジェロ・コレッリが多くのコンチェルト・グロッソを生み出し、君の師匠のトレッリが独奏協奏曲の方向性を示した」

ピゼンデル「そして、マエストロ、あなたが『調和の靈感』で形式を作り上げられた」

アントニオ「それほどのことではなかっただろう」

ピゼンデル「マエストロ。この機会にマエストロの作品を写させてもらって良いでしょうか？」

アントニオ「駄作の欠点をあげつらうつもりかな」

ピゼンデル「まさか！修行の一環です」
アントニオ「冗談だよ。自由に写してくれたまえ」
ピゼンデル「ありがとうございます」

幕間④

バッハとアンナ。
バッハ「アントニオは、このドイツの天才ヴァイオリニストが気に入ったと見えて、彼や彼の属していたザクセン宮廷楽団に曲を書き上げて渡した」
アンナ「確かあの子、あなたのところにも来ていたわよね」
バッハ「1709年だ。ライプツィヒに行く途中で寄ってくれた。礼儀正しい男だったな」
アンナ「それにしてもアントニオは、次々に作曲してたわね」
バッハ「この年に作品5から7まで、アムステルダムで出版してる。確かに楽譜を書くのは早かったようだが、彼が多くの先達の作品を改変していたのも事実だ」
アンナ「ご自分のものも何度も変えていらしたんでしょう？」
バッハ「一度書いたものをなぞりながら書き換えるんだ。初めから作るよりは早かっただろうな」
アンナ「迷いや戸惑いはなかったのかしら？」
バッハ「そこがポイントだ。ピエタはいわば自動演奏装置のようなものだ。何か思いついたら、とりあえず書いてしまって、すぐに演奏させられる。だめなら直せばいい。迷うことも戸惑うこともないんだ」
アンナ「彼にとってはオペラも同じようなものだったのかしら？」
バッハ「少し違うな。金を払う観衆を実験材料にするわけにはいかないだろう」
アンナ「当然、それに見合う作品を提供したのよね」
バッハ「しかし、そこに観衆の質の違いを意識していたのは確かだな」
アンナ「庶民を貴族の下に見てたの？」
バッハ「人としての価値ではなく、音楽の評価基準の差だ。オペラは劇場で上演したのに、オラトリオはピエタで上演した」
アンナ「演技や衣装は必要なかったのね」
バッハ「優れた音楽はそれだけで物語る。歌詞ですら、いらなくてもいえるだろう」
アンナ「それを完成するためにピエタや劇場が必要だった」
バッハ「アントニオは、楽譜として出版されたものだけが自分の作品だと思っていたのかもしれない。貴族を嫌っていたかもしれないが、その審美眼は認めてた。そして、その正しさをより多くの人に認めさせることをヨーロッパに求めたんだ」
アンナ「だからわざわざアムステルダムの出版社を使ったのね」
バッハ「そうだ。そして1717年、アントニオはヘッセン＝ダルムシュタット方伯フィリップ公爵の礼拝楽長並びに宮廷楽長に任命された」

第六幕 ピエタ慈善院 1718年初頭 アントニオ39歳 慈善院の理事たちは自由すぎるアントニオの今後について会議を開いた

理事5名が議論している。

理事①「アントニオのマントバ行きを止める手立てはないのか？」

理事②「そもそも引き留めるべきなのか？」

理事③「これまでの貢献を考えると奴に代わる者を探すのはかなりの難問だが、一緒に引き連れていこうとしとる演奏家のこともある」

理事④「そちらの方がより重大だろう。そもそもなんで彼女たちを連れて行こうって言うんだ」

理事⑤「病気がちのマエストロの身の回りの世話ってことだが…」

理事①「あれほど精力的に仕事をしている男のどこが病気がちなんだ？」

理事②「奴は今いくつだ？」

理事③「39、3月で40になる」

理事④「本当に病気もちなら、とっくに死んでるはずだろ」

理事③「それこそ、今回引き連れていく女たちのおかげってことだ」

理事⑤「何しろ本人が言うだけだからな、どんな世話を受けてるのか、怪しめばきりがないが」

理事③「金を払えばなんとかなるのか？」

理事④「劇場や楽譜の出版でかなり稼いでいるようで」

理事①「肩書はどうだ？ピエタ音楽院のトップにすれば」

理事⑤「無理でしょうな。奴はすでに実質的にその地位についているし、それは外部にも知られとる。いずれにしても音楽院の院長では、宮廷楽長に及ぶまい」

理事③「契約はどうなってるんだ」

理事④「厳密に言えば、今回のマントバ行きは契約違反かもしれないが、これまでこちらがしっかり契約を守ってきたともいえんのでな」

理事①「それでもやつは今まで勤めてきた。それもかなりまじめにだ」

理事②「メリットがあったんだろ。ミサをあげない司祭を飼っておけるのはここぐらいだ」

理事①「それなら、やつはきっとここへ戻ってくる」

理事④「宮廷楽長の職を捨ててか？」

理事①「やつはそこで終わるつもりはないんだろう。もっと上を目指すためには、このピエタが役に立つはずだ」

理事②「じゃあこのまま行かせるのか？」

理事①「やつに貸しを作っておくのも悪いことじゃない」

暗転。

ピアノ演奏

第七幕 フィリップ公 宮殿 謁見の間 1721年 アントニオ43歳

フィリップ公の前に控えているアントニオ、その横にアンナ・ジロー（18）

フィリップ「もう一年になるのかな？」

アントニオ「おかげさまで充実した日々を過ごさせていただいております」

フィリップ「そちらのお嬢さんは、確かアンナ」

アントニオ「アンナ・ジロー、歌手として修行する傍ら、私の世話を頼んでおります。このたびは、ご拝謁のお許しを得て、つれてまいりました」

フィリップ「噂どおりのかわいらしさだ。これでは、妙な噂が立つのも無理あるまい」

アンナ「私、マエストロを心からお慕い申し上げておりますが、それは師としてで、決して」

フィリップ「ハハハッ！心配するな、私は疑っておらぬ。しかし、ここは忠告すべきかもしれない？」

アンナ「ご忠告で、ございますか？」

フィリップ「そうだ。アンナ、人というのは弱いものでな。一人では狼といわず、ちょっと大きな犬にも簡単に食い殺されてしまう。生き残れたのは別の人間と協力したからだ」

アンナ「仲間を作ったってことですね」

フィリップ「一人、また一人と仲間を増やして、団結し、家族が集まって村になり、村が町に、町が国へと発展してきたんだ」

アンナ「そしてご領主様が生まれた」

フィリップ「まあそうだな。人は集まるほどにその力を増し、今やトラやライオンでも町を滅ぼすことはできない」

アンナ「みなが安心して暮らせるようになったんですね」

フィリップ「社会が安定して、多くの人が日々の糧を命をかけることなく得られるようになった。そして、心に余裕が生まれたんだ」

アンナ「恋をして音楽を楽しむことができるように！」

フィリップ「素直なんだな。マエストロの教育が行き届いているようだ。しかし、すべてがうまくいったわけじゃない。他のどんな動物よりも強くなった人間に、新たな敵が現れた」

アンナ「悪魔？」

フィリップ「いや、同じ人間だ。人間同士が競い合うようになったんだ」

アンナ「戦争するようになった」

フィリップ「そこまで極端でなくても、他人を羨んだり、陥れようとし始めた。そんな人から自分を守るにはどうしたらいいだろう？」

アンナ「誠実にお話してわかってもらいますわ」

フィリップ「君やマエストロの身近にいる人ならそうすることもできる。でも、今、マエストロによからぬ噂をたてて、喜んでる連中は、ずっと遠くにいて、本当のことなんかちっとも気にしていないんだ」

アンナ「そんな人たちのこと、ほっておけばいいんですわ」

フィリップ「確かにそうだ。遠くにいるんだからな。でも、彼らはとても無責任なんだ。

40過ぎの男性が、若い娘と一緒に暮らしてる。どうやら、その男は司祭様らしい。

でも男なんでしょ？それはそうだが、司祭様だぞ！あーこの間のミサで、司祭様は

私に流し目をおおくりになったわ。男と女が一つ屋根でくらしていれば…」
アンナ「なんてはしたない」
フィリップ「彼らが話している相手と彼らが出会うことはまずない。だから、彼らにとって話は面白いほうがいいんだ。誰を傷つけてるわけでもない。そんな噂が流れ始めると、話はどんどん面白いほうに転がって、その面白さが評判になって広まって行く」
アンナ「でも、それは根も葉もない噂なんでしょ」
フィリップ「広まってしまった噂は、やがてアンナの知り合いにも届いてしまう。しかもその時は、一人からじゃない。何人もの人間が同じ話を伝えてくるんだ」
アンナ「でも私の知り合いならそんな話、信じないわ。だって私のことを知っているはずだもの」
フィリップ「そこに立っている衛兵はどうだ？時折買い物に行くパン屋のおかみさんは？」
アンナ「顔見知りって程度の人ですわ」
フィリップ「その中の誰かは、アンナの友達と仲がいいかもしれない。彼女のところまで届く頃には、噂と事実はもう殆ど区別がつかない状況になっている」
アンナ「そんな、ひどいこと…」
フィリップ「だから、忠告だ。君は必要以上に意義を正さなくてはいけない」
アンナ「愛してはいけないのですか？」
フィリップ「もちろんかまわない。でも誤解されるような言動は避けるべきだし、常に節度をもって、行動するべきだろうな」
アンナ「今でもそうしていますわ」
フィリップ「たった今、愛してると言ったじゃないか」
アンナ「でも本当に！」
フィリップ「尊敬しているんだ。お慕いしても、敬愛してもいけない。師として心から尊敬し、病弱なお体を労わっております。いつもそう言うんだ」
アンナ「！」
フィリップ「そして、マエストロの仕事だけでなく、オファーがあれば、どんな歌でも一生懸命歌いなさい。そうすることで、いやそうすることでしか、君の言葉が本当にならないんだ」
アンナ「マエストロ、それが正しいんでしょうか？」
アントニオ「そうだな。アンナ、これからも私がお前を愛するように私を労わっておくれ」
フィリップ「涙が出るんだな」
アンナ「はい、なんだか、とても悲しくて」
フィリップ「アンナ、君が今流している涙は、人の業を悲しんでのものだ。君の純粹さの証でもある。その悲しさを含めて、人の美しさがあることを、きっといつか知ることができるよ」
さめざめと泣くアンナ。
暗転。

幕間⑤

バッハとアンナ。

アンナ「私と同じ名前だから、なんか変な気分」

バッハ「フィリップ公は、人の世の残酷さを知っていたからこそ、多くの芸術家を助けたのかもしれないな」

アンナ「でも、アントニオがマントバにいたのは二年だけよね」

バッハ「別に喧嘩別れしたわけでもないだろう。この頃、アントニオ・ヴィヴァルディはイタリアは言うに及ばず、ヨーロッパの寵児だ。それこそ引く手数多だった。フィリップ公のことだ、困ったらいつでも帰って来い、とでも言って送り出したんだろ」

アンナ「一旦はヴェネチアに戻ったのよね」

バッハ「ピエタでの契約を再開して、二年後、ローマに出かける」

アンナ「当然呼ばれたのよね」

バッハ「そうだ。自作のオペラの上演を頼まれた」

アンナ「自らヴァイオリンを奏で、自由自在に指揮する。カッコよかったんでしょうね」

バッハ「二年の滞在で二本の大作を上演した。もはやアイドルだ」

アンナ「ちょっと歳とってるけどね」

バッハ「そして、カソリックの総本山、バチカンで法王に拝謁する」

第八幕 バチカン 教皇私室 1723年 アントニオ 45歳

ピアノ演奏をバックに上手の法王に拝謁するアントニオ

暗転・休憩

第二部 幕間⑥

バッハとアンナ。

アンナ「教皇への拝謁は、あのマルチェロが、例の本を書いた後よね」

バッハ「そうだ。『当世風劇場』今時の劇場事情とでもいえばいいのかな」

アンナ「低俗に落ちたオペラを標的にして、扉にはこんな絵まで載せてた」

バッハ「この絵でヴァイオリンを弾いているのがアントニオだということは誰でもわかっただろう」

アンナ「カデンツァが長すぎる！台本作家としては三流、奇をてらった楽器の使い方、かなり辛らつにアントニオをせめたてたのよね」

バッハ「かなりの部分が当たってた。何しろ、アントニオ自身がオペラを一つ低く見ていたんだからな。劇場主の一人で貴族でもあったマルチェロにとって、アントニオの名声は耐え難いものがあったのは確かだが、さすがに的外れな批判はなかった」

アンナ「傷ついたでしょうね」

バッハ「相当落ち込んだようだ。しかし、だからこそ、教皇からの申し出はうれしかったんだろう。日記にもその感激を書き残してる」

アンナ「教皇は、本のこと知らなかったのかしら」

バッハ「どうかかわからん。だが、アントニオに関する悪い噂は、聞こえていた筈だ。気位の高いヴェネチアの連中は、アントニオの音楽は称えてたが、人として尊敬してたわけじゃない」

アンナ「所詮、床屋の息子ってことね」

バッハ「出自には最後までこだわっていたようだ。しかし、それ以外のところでは、その才能が人格まで引き上げていた。ローマでは、実力が噂を上回っていたからこそ、教皇が私室に呼んだんだ」

アンナ「歴代の教皇様も決して高潔とは言いがたかったものね」

バッハ「アントニオは自信を取り戻した。振り返ってみれば、これは、自らの最も優れた作品を選びすぐって、出版し、ファン層を広げておいた結果だ」

アンナ「自己演出にも長けていたってことね」

バッハ「若い女たちをはべらして、俗受けのするオペラを書いていたのも計算づくだったのかもしれない」

アンナ「評判を落とすことが？」

バッハ「普通にいい人だと思われていると、少しでも悪いことをすると、極悪人のように扱われる」

アンナ「あんな人だとは思わなかった！」

バッハ「逆に、ひどい男だと思っていた人間が少しでもまともなことをすれば、その評価は一挙に高まるじゃないか」

アンナ「意外といいひとだったのね」

バッハ「そして、アントニオはその頂点で、最高の傑作を書き上げたんだ。その曲は、協奏曲集『和声と創意への試み』に含まれていた」

第9幕 四季 1724年 アントニオ46歳

中央に立つアントニオ。

以下イタリア語はアントニオが語る日本語に合わせて、スクリーンに音楽はピアノ生演奏で「四季」

“La primavera Spring 春”

<Allegro>

Giunt' è la Primavera e festosetti
La Salutano gl' Augei con lieto canto,
E i fonti allo Spirar de' Zeffiretti
Con dolce mormorio Scorrono intanto
Vengon' coprendo l'aer di nero amanto
E Lampi, e tuoni ad annuntiarla eletti
Indi tacendo questi, gl' Augelletti
Tornan di nuovo al lor canoro incanto

春がやってきた。
小鳥たちは嬉しそうに歌って、春に挨拶する。
泉はそよ風に合わせて、
やさしくささやきながら流れ出す。
やがて空は暗くなり、
稲妻と雷鳴が襲ってくる。
嵐が静まると、小鳥たちは再び
うれしそうに歌い出す。

<Largo>

E quindi sul fiorito ameno prato
Al caro mormorio di fronde e piante
Dorme 'l Caprar col fido can' à lato.
<Allegro>

Di pastoral Zampogna al suon festante
Danzan Ninfe e Pastor nel tetto amato
Di primavera all'apparir brillante.
“L'estate Summer 夏”
<Allegro non molto>

Sotto dura stagion dal sole accesa
Languè l'huom, languè 'l gregge,
ed arde 'l pino,
Scioglie il cucco la voce, e tosto intesa
Canta la tortorella e 'l gardellino.
Zeffiro dolce spira, ma contesa
Muove Borea improvviso al suo vicino;
E piange il Pastorel, perché sospesa
Teme fiera borasca, e 'l suo destino;
<Adagio>

Toglie alle membra lasse il suo riposo
Il timore de' lampi, e tuoni fieri
E de mosche, e mosconi il stuol furioso:
<Presto>

Ah che pur troppo i suoi timor sono veri
Tuona e fulmina il cielo grandinoso
Tronca il capo alle spiche e a' grani alteri.
“L'autunno Autumn 秋”
<Allegro>

Celebra il Vilanel con balli e Canti
Del felice raccolto il bel piacere
E del liquor di Bacco accesi tanti
Finiscono col Sonno il lor godere
<Adagio>

Fa' ch' ogn' uno tralasci e balli e canti
L'aria che temperata dà piacere,
E la Stagion ch' invita tanti e tanti
D' un dolcissimo sonno al bel godere.
<Allegro>

I cacciator alla nov'alba à caccia

花ざかりの美しい牧場では
木々の葉がやさしくざわめき
羊飼いは忠実な犬をかたわらに眠っている。

牧歌的な牧笛の陽気な調べに合わせて
ニンフと羊飼いは踊る、
輝くばかりの装いの春の中に。

太陽が焼けつくように照るこの厳しい季節に、
人も家畜も元気を失い、
松の木さえも暑がっている。
かっこうが鳴き始め、そしてしきりに
山鳩とごしきひわが歌う。
やさしいそよ風を追い払って、
突然に北風が襲いかかる
羊飼いは泣く。 荒れ狂う嵐の恐怖と、
自分の不運に恐れおののいて。

羊飼いは疲れたからだを休めることもできない。
稲妻とはげしい雷鳴、
そして蚊や蠅の怒り狂う群れにおびやかされて。

ああ、彼が恐れていたとおりになった。
空は稲妻、雷鳴、はては雹や霰まで降らせ、
熟した果物や穀物の穂をみなたたきつぶす。

村人たちは踊りと歌で
恵まれた収穫を喜び祝う。
バッカスの酒のおかげでこんなにわき立ち、
みんな眠りこけるまで楽しむ。

一同が踊りと歌をやめたあとには
秋の穏やかな空気がこころよい。
そしてこの季節はあまい眠りで、
すべての者を気持ちの良い憩いへと誘う。

夜明けになると、狩人たちは狩りに出かける、

Con corni, Schioppi, e cani escono fuore
Fugge la belva, e Seguono la traccia;
Già Sbigottita, e lassa al gran rumore
De' Schioppi e cani, ferita minaccia
Languida di fuggir, mà oppressa muore
“L'inverno Winter 冬”

<Allegro non molto>

Agghiacciato tremar tra nevi argenti
Al Severo Spirar d'orrido Vento,
Correr battendo i piedi ogni momento;
E pel Soverchio gel batter i denti;

<Largo>

Passar al foco i di quieti e contenti
Mentre la pioggia fuor bagna ben cento

<Allegro>

Caminar sopra il ghiaccio, e a passo lento
Per timor di cader girsene intenti
Gir forte Sdruciolar, cader a terra
Di nuovo ir sopra'l ghiaccio e correr forte
Sin ch'il ghiaccio si rompe, e si disserra;
Sentir uscir dalle ferrate p/orte
Scirocco, Borea, e tutti i venti in guerra
Quest'è'l verno, ma tal, che gioia apporte.

角笛と鉄砲を持ち、猟犬たちを連れて。
けものはすでにおびえ、騒がしい。
鉄砲の音と犬の声に
疲れ果て傷つき、おののいている。
もはや逃げる力もなく、追い詰められて倒れる。

冷たい雪の中の凍りつくような寒さ。
吹きすさぶ荒々しい風の中に行く。
絶え間なく足踏みしながら走り、
あまりの寒さに歯の根が合わない。

炉端で静かに満ち足りた日々を送り、
その間、外では雨が万物をうるおす。

ゆっくりとした足取りで氷の上を歩く。
転ばないように注意深く進んでゆく。
乱暴に歩いて、すべって倒れる。
また起き上がって、氷の上を激しい勢いで走る。
氷が砕け、裂け目ができるほど激しく。
閉ざされた扉の外に出て、
南風、北風、あらゆる風が戦っているのを聴く。
これが冬なのだ。でも、何という喜びをもたらすのだろう。

幕間⑦

バッハとアンナ

アンナ「自分の曲にこんなソネットを付けたのは初めてよね」

バッハ「それぞれにふさわしい14行詩を書き添えたのは、自信の表れだろう」

アンナ「イメージ通りに曲を書き上げることができたってこと？」

バッハ「マルチェロなら、驕りの表れ、とでも言うだろうが、曲の完成度は誰の目にも明らかだ」

アンナ「まさに絶頂期を代表する曲になったわけね」

バッハ「そうだ。彼は登り詰め、頂上を極めた」

アンナ「聴衆からも高い評価を受けたのよね」

バッハ「ヨーロッパすべてが彼を称えた。しかし、どんな人間もずっと頂上に立ち続けることはできない」

アンナ「後に続くのは下り坂」

バッハ「一番初めに陰りを見せたのは彼を育んだベネチアだった」

アンナ「相変わらずオペラは上演され続けてたじゃない」

バッハ「1725年から35年までの10年間に10作もだ」

アンナ「人気があったから続いていたんじゃないの？」

バッハ「評価は一気に萎むものじゃない。一本目で違和感を覚えても、二本目で戻ることを期待する。それが積み重なって行って、次第に期待を失望が上回っていくんだ」

アンナ「一つ一つの作品の出来とかかわらずに？」

バッハ「人間ってというのは飽きっぽいものだ。どんなに素晴らしいものでも続けて見せられれば、飽きてしまう。現に1734年に上演された『オリュンピアス』は、最高傑作の一つだ」

アンナ「次の年にはゴールドーニと知り合って、弱かったセリフもうまく入れられるようになったのよね」

第10幕 アントニオ書斎 1735年 アントニオ57歳

必死に台本を書いているアントニオのところへカルロ・ゴールドーニ（28）がやってくる。

カルロ「マエストロ？」

アントニオ「『旦那様！わたくしのことについては、旦那様が一段と、その名誉に添い、お心が休まると思し召すとおりになさってくださいませ』」

カルロ「夫に自分の身分について、悪いうわさが立っていると聞かされたグリゼルダのセリフですね」

アントニオ「『なぜなら私は、あの方々よりも身分の低い者であることや、あなたのご親切にも私に授けてくださったこの名誉に、自分が値しない者であったことを存じておりますので、どんな措置を受けましても満足でございます』満足なものか！長すぎる！」

カルロ「『殿の御心のままに。私を引き上げてくださったのは殿、今後私をどうなさるかも殿次第』」

カルロの言いなおしを急いでメモに取るアントニオ。

アントニオ「『奥様、私はもし自分が命を落としたくないと思ったら、ご主人の命令通りにいたさねばなりません』」

カルロ「理不尽な命令を受けた従者のセリフ！」

アントニオ「『ご主人が私に命令なさったことは、私が奥様のお嬢様を取り上げて、そうして…』」

カルロ「『しがない従者のこの身、主が赤子を奪えと命ずれば…逆らえば命に関わりませぬ』」

再び書き写すアントニオ。

アントニオ「見事だ！お若いの、君はどこから湧いて出た？」

カルロ「カルロ・ゴールドーニというしがない物書きでございます。今宵は一目マエストロにお目にかかろうと参上しました」

アントニオ「そういえば、アンナが誰か来ると…」

カルロ「お邪魔でしたら、出直して」

アントニオ「邪魔なものか！アンナ！パオリーナ！ワインだ！この優れた若者との出会いを祝うんだ！」

アンナと妹のパオリーナワイングラスを持って登場。

アントニオ「アンナは知っているな。こっちは妹のパオリーナだ」

カルロ「初めまして、物書きの…」

アントニオ「何を言っておる、今日から君はわしのパートナー、列記としたオペラ台本作家のカルロ…？」

カルロ「カルロ・ゴルドーニです」

アントニオ「偉大なるオペラ作家、カルロ・ゴルドーニの誕生を祝して、乾杯だ！アンナ、音頭をとれ」

アンナ「マエストロ、そんなにはしゃいで、お体に触りますよ」

アントニオ「ついさっきまでわしは絶望の淵に立っておった。息も絶え絶え、彼が入ってきたことにも気づかぬほど憔悴しきっておったのじゃ。それがこの若者のおかげで蘇った。気分は上々じゃ」

パオリーナ「ほんとに！こんな元気なマエストロを見るのは、一か月ぶりですわ」

アントニオ「そんなに長く？」

パオリーナ「あちこち飛び回って、お体はボロボロ、毎晩ベッドに倒れこんでいらした」

カルロ「それほどとは…」

アントニオ「何を大げさに。この通り、わしはびんぴんしとる！」

アンナ「わかりましたから、では改めて、カルロさんとの出会いを祝して、乾杯！」

全員「乾杯！」

暗転。

幕間⑧

バッハとアンナ。

アンナ「楽しそうじゃないの」

バッハ「どんなに辛い時でもそれなりの喜びはあるものだ。ベネチアで人気に陰りが出初めても、フィレンツェ、ローマ、オーストリア、フランス、遠くなればなるほど、陰りが薄らいで、むしろ、栄光の光に包まれていた」

アンナ「逃げ道があったようね」

バッハ「そこへ逃げ込んで、時代の波が自分とずれていくのがわからなかったんだろう。

彼は、ルイ15世やカール六世に愛され、多くの王侯貴族と親しく言葉を交わしていた」

アンナ「でも、貴族にはなれなかったのよね」

バッハ「それを望んでいたわけじゃない」

アンナ「じゃあ何を目指していたの？」

バッハ「一度トップを走ったランナーは、常にトップを走りたがる。過去の栄光を捨てきれないんだ」

アンナ「もう50を過ぎてるのに？」

バッハ「流行り、というのは恐ろしいものだ。同じ人間が、作り続けられるものじゃない」
アンナ「彼は、それを望んでたの？」
バッハ「彼の不幸は、新たな曲を作れたことかもしれないな」
アンナ「自分では新しいと思って作っても…」
バッハ「世間は、そこに古さを感じてしまう。気づかないのは本人だけだ」
アンナ「はっきりした欠点ではないのね」
バッハ「だからほころびは奇妙なところからやってくる」

第11幕 ヴェネチア 1737年 アントニオ59歳

食事の支度をしているアンナとパオリーナ。下手から入ってくるアントニオ。

アンナ「マエストロ？」
アントニオ「もうおしまいだ」
パオリーナ「何をおっしゃいます。フェルラーラでの公演にも目途がたったのでしょ
う？」
アントニオ「仮に、できたとしても、わしには何もできん」
アンナ「どうしてですか？マエストロの作品でしょ？」
アントニオ「わしは、司祭の務めを果たしていないそうだ…」
パオリーナ「なにを今さら、」
アンナ「誰がそんなことを…」
アントニオ「フェルラーラの枢機卿、トマゾ・ルッフオだ」

上手に現れる枢機卿とドラゴナ公爵。

枢機卿「このヴィヴァルディというのは司祭だと聞いているが」
公爵「はい、ヴェネチアで任命されておりますが」
枢機卿「で、今はどの教会でミサを？」
公爵「彼は平服の在野司祭ということで」
枢機卿「しかし、聖職者であることに変わりはないだろう」
公爵「確かに」
枢機卿「その男がなぜ、このフェルラーラでのオペラ興行を仕切っておるのじゃ？」
公爵「彼は、ピエタの音楽教師でもありまして、作曲も手掛けて…」
枢機卿「ピエタの慈善院のために働き、曲を献呈するのと、このフェルラーラで、オペラ
の興行を打ち、金を受け取ろうとするのは、まったく関係がない」
公爵「はっ、ですが、今回のオペラは彼の作品でもありますし、主役も彼が連れて」
枢機卿「アンナ・ジローとか申す者だな？」
公爵「はい」
枢機卿「この男のところで暮らしておる、と聞いているが」
公爵「妹と一緒に身の回りの世話を」
枢機卿「修道女じゃあるまい」
公爵「違いますが、長年、付き従っておりまして」

枢機卿「聖職者を辞する気はあるのか？」

公爵「それは…」

枢機卿「もし還俗する気がないのなら、わしはこのヴィヴァルディなる者が、この地に入ることを禁ずる」

公爵「でもそれでは、公演が…」

枢機卿「ドラゴナ公爵、君はこの公演の出資者じゃったな？」

公爵「はい」

枢機卿「既にいくらかつぎ込んだのか？」

公爵「それはすべて、ヴィヴァルディが…」

枢機卿「では、何も問題はあるまい。上演中止となった時の損害は、これまでの罪への報いとなるわけだ。そもそも謝肉祭に聖職者が活動することすら許しがたい。良いな、ヴィヴァルディをこのフェルラーラへ招くことはまかりならんぞ！」

暗転。下手にアントニオ。

アントニオ「私が司祭としての務めを行っていないのも、ジロー姉妹を旅に同行させているのも、ひとえに病弱の身だからです」

暗転。

幕間⑨

バッハとアンナ

アンナ「まったく奇妙なところからのしっぺ返しね」

バッハ「アントニオは、評判の落ちてきたベネチアから、本拠地をフェルラーラに移そうとしていたんだ」

アンナ「近すぎたんじゃないの？」

バッハ「そうだな。かつては教皇も多めに見たことを枢機卿ごときに禁じられ、相当落ち込んだようだ」

アンナ「結局オペラはどうなったの？」

バッハ「アントニオ抜きで上演された」

アンナ「評判は？」

バッハ「散々だ。アンナ・ジローは出ないし、レチタティーボのバックのチェンバロがロボロで、露骨にけなされた」

アンナ「弱り目に祟り目ってとこね」

バッハ「しかし、ここで完全に打ちのめされていれば、その後の人生が変わったかもしれない」

アンナ「また支持者が現れたのね」

バッハ「1739年12月、ポーランド君主ザクセン選定侯の王子フリードリッヒ・クリスティアンが、アントニオの演奏を聴くためにベネチアを訪れた」

アンナ「その頃はもうピエタをやめてたんじゃなかったかしら」

バッハ「その前の年にやめてた。しかしお祭り好きのベネチアは王子を歓迎し、アントニオを指揮者に据えて、ピエタで大演奏会を開いたんだ。翌年の三月には、慈善院のた

めにシンフォニアと二曲の協奏曲を献上して」

アンナ「義理堅いのね」

バッハ「アントニオはベネチアを離れる決意を固めてたんだ」

アンナ「どこへ行こうと？」

バッハ「ドレスデンだ。彼の音楽をわざわざ求めてベネチアまでやってきたフリードリッヒ王子を頼ったんだ」

アンナ「でも亡くなったのは…」

バッハ「ウィーンだ」

第12幕 サトラ一家 ウィーン 1741年7月28日 アントニオ63歳。

ベッドに寝かされているアントニオ。その横にアンナとパオリーナ。

アンナ「マエストロ、ここは寂しすぎます。ご領主様が亡くなったとはいえ、ウィーンにもお知り合いは大勢いらっしゃるじゃありませんか」

アントニオ「アンナ、いいんだ、誰を頼ったところで、残された時間に変わりはない」

パオリーナ「マエストロ！お医者様を！」

アントニオ「パオリーナ、今日までのこと、本当に感謝している」

アンナ「マエストロ！」

アントニオ「アンナ、最後の頼みだ。葬儀はひっそりと頼む」

アンナ「そんな、マエストロにふさわしいものを」

アントニオ「派手な舞台は十分見てきた。それにどんなに壮麗な葬儀でも、わし自身が見ることはかなわぬ」

パオリーナ「でも、お慕いしている皆さんが…」

アントニオ「もう、誰もわしを必要とはしていない」

アンナ「そんなこと、私たちは」

アントニオ「お前たちはもう、立派に生きていける。そうすることで、わしの誠実さが…」

パオリーナ「マエストロ、もうお話は…」

アントニオ「もう十分だ。栄光の日々を思って、旅立っていけ…る」

二人「マエストロ！」

タイトル「アントニオ・ヴィヴァルディの遺体は彼の望み通り、質素な葬儀の後、小さな墓地に埋葬され、その後、二百年も忘れ去られた」

エピローグ ベルリン・ジングアカデミー 1829年3月11日

タイトル マタイ受難曲 バッハの私語始めてメンデルスゾーンの指揮で演奏。

指揮を終えたメンデルスゾーンが現れる。

拍手とともにやってくるシューマン。

シューマン「フェリックス、君はバッハのすばらしさを改めて感じさせてくれた。ありがとう」

フェリックス「理論派のロベルト・シューマンにわかってもらえて光栄だ。私たちは、彼の業績にもっと早くきづくべきだったんだ」

暗転。

タイトル このバッハの再発見が、ヴィヴァルディの業績の再評価につながった。一度に5万ドゥカート以上も稼いだが、その無秩序な浪費のため、ウイーンで貧困のうちに死ぬことになった男は、20世紀に復活し、今なお多くの国でそのファンを増やしている。

参考文献

- 永遠の音楽家 ヴィヴァルディ ロラン・ド・カンデ著 戸口幸策訳 1970年 白水社刊
ヴィヴァルディ 生涯と作品 マルク・パンシエル著 早川正昭・桂誠訳 1970紀要年
音楽の友社刊
バロック時代を代表するイタリアの作曲家 ビバルディ バム・ブラウン著 橘高弓枝訳
1998年偕成社刊